

九州紀行小考

板坂, 耀子
福岡教育大学助教授

<https://doi.org/10.15017/11974>

出版情報 : 語文研究. 62, pp.13-26, 1986-12-10. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

九州紀行小考

板 坂 耀 子

「九州紀行」という用語は近世紀行文学史上、いったい、成立し得るであろうか。私はこれまで研究を進める上のめやすとして、東海道・木曾路・日光・蝦夷・社寺参詣・登山・花見・入湯・女流といった項目を仮に設けつつ紀行文を検討してきた。若干の問題はあっても、概ねこれらの項目を設定しての作品検討に不都合を生じたことはなかった。だが九州紀行と敢て定義する時、それが蝦夷紀行・日光紀行等に匹敵するような独自性あるいは特異性を持つかは疑問に思えた。

図書総目録から検索しうる九州関係と考える紀行は百点近い。その五分の一弱は目録等の書名のみで現存せず、残りのほぼ半数に私は目を通した。それらの紀行文に共通し、他の紀行文とそれらをわかっ独自の特徴はどこにあるか。

大淀三千風「日本行脚文集」(元禄三)、古河古松軒「西遊雜記」(天明三)、橘南谿「西遊記」(寛政七)、野田成亮「日本九峰修行日記」(文化三)等には、いずれも九州に関する部分が含まれ、鋭い観察とすぐれた描写がなされている。だが、先述した意味での九州紀行とは、厳密には異ると私は思う。これらの作者たちは、紀行文の

専門作家に近い。全国を旅していて、偶々というか必然的にか、その中に九州も含まれたにすぎない。意識して他と区別するあたりでとりあげられてはいないのである。

「中川泰寛旅行日記」(正徳六)、高木善助「薩陽往返記事」(文政十一〜天保九)、「薩藩江戸上り道中記」(年代不明)等もまた、九州紀行の特色を示すものとは言い難い。この作者たちは公務という必要性があつて往来し、その行先なり行程なりが九州であつたにすぎないからである。

「九州紀行」と私が言うとき、そこにはやはり作者が「九州」なる地について抱く一つの原像と、旅する上での目的意識がなければと思う。近世の人々の中に、そのような「九州」は、存在していたらうか。芭蕉は九州を訪れておらず、西鶴、近松、あるいは馬琴、その他の文学作品を見ても、たとえば、歌枕と義経伝説に彩られた「みちのく」像に匹敵する程の「九州」像を見出すことは難しい。高橋富雄氏が述べられる如く、東国に比して比較的早く平定された西国は、異境として意識されることが少かつたとすれば、近世の人々の中に「西国」あるいは「九州」という概念は、殊更、形成し

別表 I

文明 12	筑紫道記	宗 祇	文化 3	筑紫紀行	菱屋平七
天正 15	九州道の記	細川幽斎	〃 3	日本九峰修行日記	野田成亮
文禄元	九州の道の記	木下長嘯子	〃 14	長崎紀行	
慶長 3	筑紫紀行	鎌田定清	文政元	鹿児島日記	杉浦義信父
元和 9	源忠総朝臣豊後紀行		〃 8	〔鍋島紀行〕	
延宝 8	筑紫道日記	神原伊安	〃 10	菅の下葉	
貞享 2	筑紫巡遊目録	丸山可澄	〃 11	薩陽往返記事	高木善助
元禄 3	日本行脚文集	大淀三千風	天保 4	菅根長崎日記	
〃 6	筑紫遊記	無着道忠	〃 6	不知火行記	
元禄頃	道之安良		〃 8	五月雨紀行	
正徳 6	中川泰寛旅行日記		〃 14	西海雜誌	松浦武四郎
明和 4	長崎行役日記	長久保赤水	弘化 4	筑紫道之記	双 鶴
〃 7	伊藤某九州廻ノ記		嘉永 6	長崎日記	川路聖謨
〃 7	筑紫海路記	宗 敬	安政 6	塵 壺	河井継之助
安永 7	筑紫日記	渡辺綱峯	文久 3	旅の日記	根本重蔵
天明 2	筑紫紀行	帛 夢		山庵長崎海陸紀行	
〃 3	西遊雜記	古河古松軒		佐藤信淵九州紀行	
〃 6	筑紫紀行図誌	素 言		西遊日歴	
〃 8	江漢西遊日記	司馬江漢		霧島紀行	
寛政 6	鶴台九州紀行			薩藩江戸上り道中記	
〃 8	太宰府紀行(九大)			贈一忍子九国紀行	不谿隱士
〃 8	〃 (ソウル大)			筑紫紀行 一もど日記	
寛政年間	西遊記	橘南谿		つくし草	大久保勲三郎
文化元	筑紫道草	林英存			

難かつたとも言える。

1

そこで、管見の紀行文の中から、九州そのものに何らかの興味を抱いて訪れているかに見える作品類を検討し、コースや記述の中からうかがいあがる特徴はないかと考えた。

別表Ⅱに見る如く、比較的多いのは、小倉から太宰府・佐賀・あるいは熊本・島原・あるいは又、唐津を経由して長崎に至り、そのいずれかを経て戻るコースを含むものである。この経路では、小倉・博多等の大都市の描写や、宗像、香椎、箱崎等の神社、武雄、嬉野の温泉、名護屋の城趾等の説明がなされるのが常となっている。

とはいえ、それらに関する記述は概ね簡略である。別表Ⅲに示したように、九州紀行がある程度まとまった記述を行なうのは、主に太宰府と長崎で、このコース以外で比較的記述が多い阿蘇山・彦山・宇佐八幡・阿弥陀寺（下関）と比しても差がつくように思う。

2

太宰府と長崎という二つの都市は、当時どのようにとらえられていたか。まず太宰府の方から見よう。

「太宰府ノ町ハ三四百軒モ有ベキ草薺家バカリニテ見苦キ所ナリ至テ辺鄙ノ地ニシテ菅公ノ神社ノ無キ者ナラバ絶テ人ノ来ルベキ里ニハ非ルベシ」（佐藤信淵九州紀行）のような記述もある。しかし、「太宰府小史」が、「大君の遠の御かど太宰府の繁栄は朝廷の御威光

に伴ふ性質のものであった。この意味に於て太宰府の全盛時代は、奈良時代から平安時代前期へかけての二百年であったといつて良いであらう。その平安時代も降つて来ればも早昔の太宰府ではない。

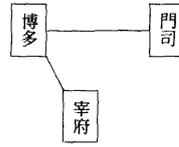
そしてその太宰府の繁栄に決定的な一線を劃したものは、矢張り平安末期の政権の推移であつた。即ち朝廷から幕府へと政権は移つて来たのであつて「太宰府は天下の一都会であり、その股賑京師に次ぐものがあつたと考へられているのであるが（略）何れにするも天満宮の性格が完成されて来るのは平安末期であり、この時に至れば天満宮は明らかに文道の祖であつて、大江匡房は太宰権帥として赴任する事二度、大に天満宮を尊崇したが、それは矢張り菅家、江家、共に文道の家であり天満宮はその文道の祖なるが故にであつた。」

「そして天満宮の官制には、事実上平安末期の変動に依つて終りを告げ、次の武家時代に至れば、太宰府は少弐氏の居城となつて、戦禍は引き続きこゝに及び、往時の太宰府は見る影もなき荒廃へと陥つてゆくのであるが、天満宮の神威は年と共に輝き、矢張り時に依る消長は免れなかつたにしても、幾変遷を続けて今日に至り、ありし日の太宰府の片影を留めているのである。」「万葉を用いて見るならば、当時歌壇の中心は寧ろ太宰府に移行したかの觀を呈して居る。この状態は旅人が京都に帰つた後も、尚暫らく続けられるのであつて、太宰府の文化に就て特筆をされなければならない事であらう。」（竹岡勝也「上代の太宰府」と述べるように、かつての政治上の重要性を失つても中央文化の象徴として偉大さはなお人々の意識に残つていたようである。「二月廿五日此ころは空もいと長閑に侍りければつくしを行めくり宰府の宮なむとに詣むと旅たつとて」（渡辺綱峯「筑紫日記」冒頭）「廿一日此国の宰府天満宮ハ都にて年

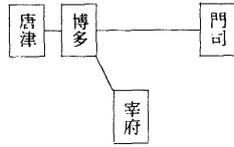
別表Ⅱ

行程は極度に簡略化し、往路と復路も記していない。一部市の周辺の遊覧についても省略した。あくまで全体の傾向を把握するためのものである。

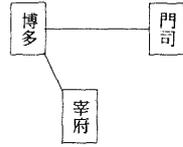
宗祇「筑紫道記」
幽斎「九州道の記」



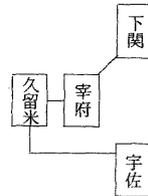
長嘯子「九州道の記」



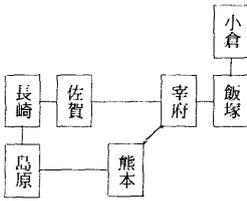
鎌田定清「筑紫紀行」



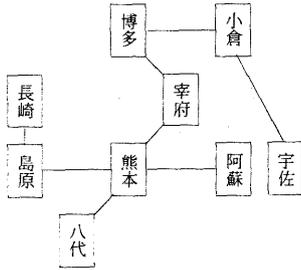
「源忠総朝臣豊後紀行」



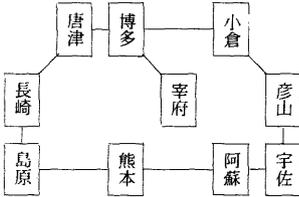
神原伊安「筑紫道日記」



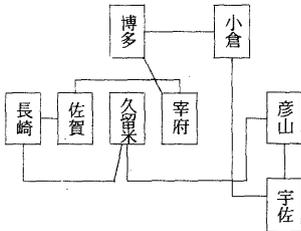
丸山可澄「筑紫巡遊日録」

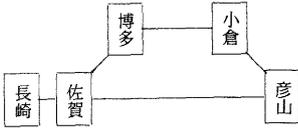


三千風「日本行脚文集」

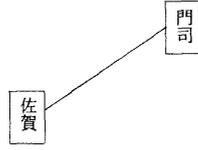


無着道忠「筑紫遊記」

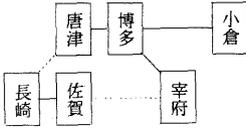




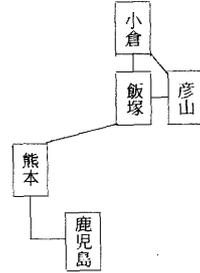
渡辺綱峯「筑紫日記」



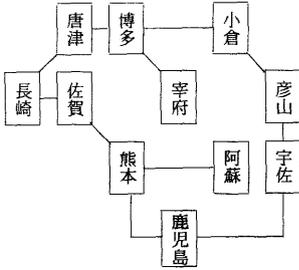
「道之安良」



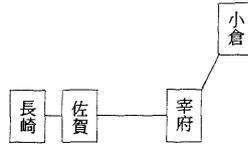
俗夢「筑紫紀行」
(点線部は不明確)



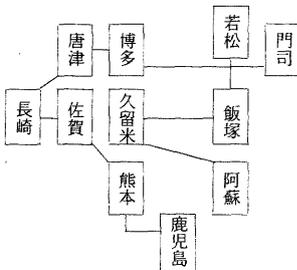
「中川泰寛旅行日記」



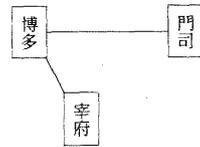
古松軒「西遊雜記」



長久保赤水「長崎行役日記」

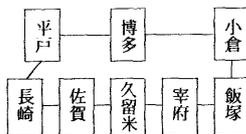


素言「筑紫紀行図誌」

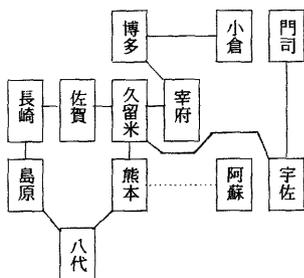


「伊藤某九州廻ノ記」

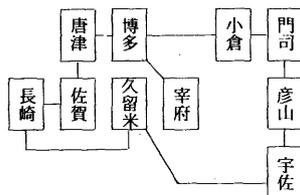
「江漢西遊日記」



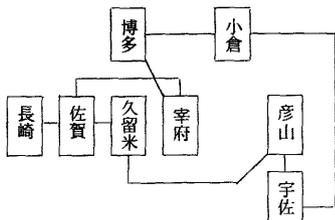
林英存「筑紫道草」
(点線部は実際には行っていない)



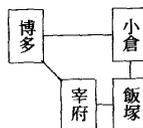
「鶴台九州紀行」



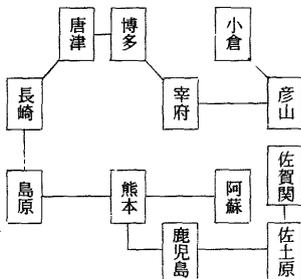
菱屋平七「筑紫紀行」



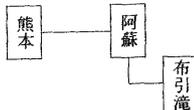
「太宰府紀行」(九大)



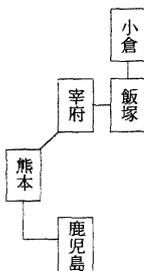
野田成亮「日本九峰修行日記」



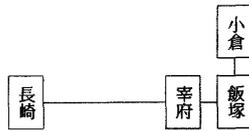
「太宰府紀行」(ソウル大)



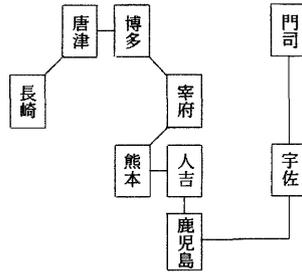
杉浦義信「鹿兒島日記」



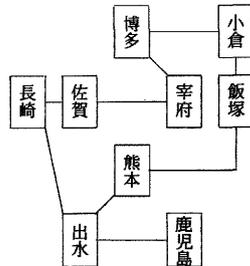
「山庵長崎海陸紀行」



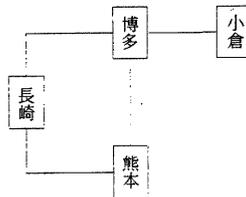
「菅の下葉」



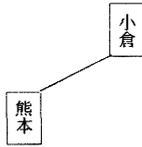
高木善助「薩陽往返記事」



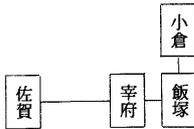
「菅根長崎日記」



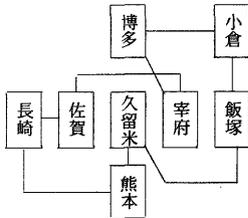
「五月雨紀行」



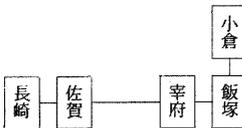
「鍋島紀行」



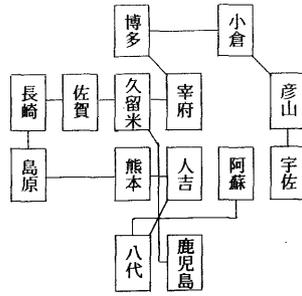
河井継之助「塵壺」



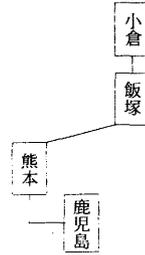
川路聖謨「長崎日記」



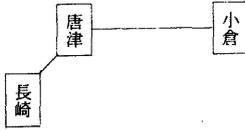
「佐藤信淵九州紀行」



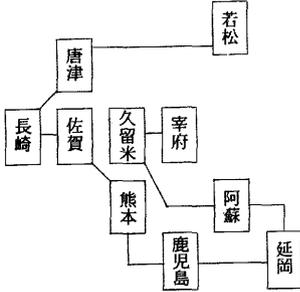
「薩藩江戸上り道中記」



「贈」忍子九国紀行



大久保勘三郎「つくし草」



比信仰し奉りしかハかゝる便りに拝せんことハおもひもかけぬさち
なればこゝより詣侍らんと」(鍋島紀行)のよ様に、この地をめざ
す人は多かった。貝原益軒「太宰府天満宮故実」巻の下(天和三)
は次のように記す。

凡そ御社は南にむかへり。かまと山東にそびえ、天拝山西に向ひ、
染川前に有、石踏川北に流れ、西にめぐりて思川と成る。四王院、
城の山、北にそばだち、蘆城の驛南に在、西は観音寺在り、都府
樓の跡もその西につらなれり。山川村里のけしき、林の木立まで
うるはしく、見所多くて、いづくの宮所よりも、殊にすぐれたる
佳境也。鎮西府、今はなくて、谷ふかき山ふところなれど、みや
しろのおはしますゆゑ、今も猶人靈おほくいらかをならべたり。
かゝる靈地に、おのずから、宮柱のふとしき立しも、神徳のいと
すぐれさせ給へる故なるべし。されば、あめが下の人、高きもい
やしきも、此神をたふとみうやまはざるはなし。おち方の人も、
一度、此御社に詣てこん事を願へり。爰を以て、春秋の祭り、月々
の念、五の日みならず、日毎にまうで来る人、くびずをつぎ、袖
をつらねずといふ事なし。^註

「貴賤諸国より寺参詣之由」と「中川泰寛旅行日記」も記す。「先
ツ一ノ華表は町の中程に建唐金也。(略)爰を入ぬれハ池あり。心字
の池ト云。心の字形に模せし物之由。此池に水鳥群居また鯉鮒数を
しらす。参詣人はせくわしを買て面に投れハ魚鳥共ニ争ひ食ふ有様
珍らし。」(太宰府紀行)「聞しにもまさりて宮造りのとふとさ千と
せふる松のみとりもふかく生茂りたるに杉の木立もたゝならぬ枝を
かハして栄へたるけしき神さひわたりて神慮の程あふくもなかゝ

別表Ⅲ 各数字は丁数（活字で参照したものは頁数）を示す。

書名	全体	九州	宰府	長崎	阿蘇	宇佐	彦山	阿弥陀寺
筑紫道之記（双鶴）	31丁	0	0	0	0	0	0	1
長崎日記（川路聖謨）	132P	85	0.5	64	0	0	0	0
摩壺（河井継之助）	35P	17	0	6	0	0	0	0.25
旅の日記（根本重蔵）	26丁	0	0	0	0	0	0	0
山庵長崎海陸紀行	19丁	15	0.25	13	0	0	0	0.05
佐藤信淵九州紀行	67丁	57	2	2	0	0.5	2	0.25
薩藩江戸上り道中記	126丁	20	0	0	0	0	0	0.5
贈一忍子九国紀行	3P	1	0	0	0	0	0	0.2
西海雜誌（松浦武四郎）	124P	124	0.5	9	1.5	0	2.5	0
長崎紀行	233丁	0	0	0	0	0	0	0
筑紫海路記（宗敬）	7丁	1	0	0	0	0	0	0
筑紫紀行 一もと日記	26丁	0	0	0	0	0	0	0
つくし草（大久保勲三郎）	72丁	72	0.5	6	0	0	0	0

おろかにこそ（略）かたはらの池には鯉鮒のあまた遊びて立よる人になれたるさまなり」（『鍋島紀行』）等の記述を見ると、神社の様子は中世と比して整備されてきており、「銅の鳥集より此鳥居まで。一丁あまりの間は茶屋宿屋のみなり。」「木の本には。参詣の人々の休所。茶店などいとお潔淨なるがあまたあり。」（『菱屋平七』筑紫紀行）「あるはいろく／＼茶てんなんといとにきハひたり」（『鍋島紀行』）「御祭礼中生姜を夥敷店前へ出してひさく由縁しらす東都芝神明の如し又梅ヶ枝餅とて梅の形を彫たる金二入焼て商ふ店夥し是当所の名物也」（『菅の下葉』）のように、観光地としての設備もととのっていた。

3

一方長崎はどうか。「予長崎の風俗をさぐり見しに、人情あしき所なり。異国より渡るものはむかしよりも盗み取る事を手からにして耻ると思はず。（中略）我國の耻ともなれば改め度ものなり。」（『西遊雜記』）「町家八都て家造亘敷日本一の大湊なれば人氣も潤達にして皆美服美食を好み繁昌なる事三ヶの都も及難く恥る斗也」（『菅の下葉』）といった評価の差は時にあつても、こゝも又「肥前国長崎といふ所は。異国船輻輳の大湊にして。いと珍らかなる所なりと。若年の時より聞及びて年来行て見まほしくおもひつれど。行程山海を隔たる遠国の事。且は家業怠りかたうして。たやすく旅行も得思ひたらざりしを」（『菱屋平七』筑紫紀行）冒頭）「されは聞及し長崎百余里の驛程はるかなれば胡越を隔る思をなしさま／＼此地の奇話聞毎に心酔し余所の事におもひしが此度の西遊おもひ廻せば夢路をた

どりし心地し」（林英存「筑紫道草」）と人々が強い憧憬を抱いた土地であつた。大淀三千風の「日本行脚文集」を引こう。

貞享元九月二日肥前長崎に。佐の碇をつきぬ。さてしもかねて傳へ聞しに十倍して。繁昌栄耀の境地。又ならびなし。九方は重山を囲み。一方は群船の海大路なり。江山畫裏。四面をわかち。舟浜市中往來を見る。岫輪寺社を擎げ。彩氣梵門を撫。丹霞瑞籬のうはぬりをなせば。幣風古松に付声をとなふ。ことさら唐刹の三ヶ寺。金玉異曲の雕匠。美尽し善尽し。都にめされぬ奇麗なり。時なるかな。廉直仁慈の徳浪は。和漢同風の政道をつらぬき。宝物珍財を運ぶ錦帆は。年を追ひていやまされり。されば異国人の風俗。四夷八蛮の道の軌。土産物。鬻物。唐僧來朝の由來。遠くは吉利支丹船襲來の事。近くは貨物刻府の品々。通事／＼にちなみ。土地の図。海路の記まで少細に書し。將來し侍れと。あまりに事繁ければ略す。大要をいはは。只阿蘭陀船のみなり。長二十六七間。横一八九間に。四重の階様あり。彩色の奇麗。文の帆チヤンの網。諸事車操をもて神姿自在をなす。三國一の見物なり。是に対すべきは、和朝の富士山の外はあらじとおぼふ。総て長崎の事は。中／＼言翰に尽しがたし。こゝろざしあらむ人は一たび渡海し給へし。海路みな瀬門うちなれば河船の如し。大阪より豊前小倉まで百三十里。小倉より陸路五十里。合百八十里なり。所詮長崎を見ずして。京物語はすまじかりける。予は此秋より。明る二月の末まで見聞せしが。今にこゝろにかゝるは。当所のおもかげなり。あはれ存命侍らば。今一たびとねがひしになん。

当時の人々の長崎への情熱がよくうかがえる一文である。「明方

早く驚されて六日の朝はとく目の覚ければ幸に駈出て四方の気色を見渡せハ三方は屏風を立し如く連綿たる丘嶺南北に奔走せり一方ハ潮水岸を濱し岸下にハ諸国の舳艫を繋留たり」(「筑紫道草」)の様
に、長崎を訪れた旅人の記述には、一種の興奮がみなぎっていることが多い。とりわけ三千風も記し、「六日 天気未下刻出立細川家の舟宝来丸ニ乗ル其前阿蘭陀舟遠見致ス見物男女雲霞のことし」(「大久保勘三郎「つくし草」)と言われた阿蘭陀船の壮観は、長崎の異国情緒の圧巻であつたらしく、古河古松軒も「西遊雜記」に次の様に記す。

十八日昼過より紅毛船沖近く来りしとて町内さはがしく、迎ひ船・引船の用意までにぎにぎし。予年来の望は今宵こそ見る事と、心いそがしく浜辺に出て今や／＼と待しに、やう／＼暮に及びて長崎の津に入る。折ふし空くもりて海面くらく、石火矢をうつ火のひかり稲妻のごとくに見へ、音は山も崩るるばかり高く、其響き左右の山をめぐるやうに長崎をなり渡る事なり。初め三つ五つ打までは珍らしく面白き心も有りしに、後々になりてはあまりに音の強ければ腹に響くやうにて心あしく、最早打止めよかしと思ひぬ。(略)長崎に下りて此石火矢の音を聞かざる人は信じがたかるべし。(略)長崎の事は書尽しがたく(略)七月十七日此地に來り。廿八日発足す。

4

ところで、別表Ⅲを見ると、中村幸彦先生が旅行記と呼ばれる、中世以前の主情的傾向を廃した、より近世的な紀行文に、長崎の記

事が多くとりあげられている。松浦武四郎「西海雜志」は項目別に九州の風物を記すが、太宰府に関するものは「鸞啓祭」一項目なのに比し、長崎については「鶴乃枕」「畫師招牌」「蘭種異草」「鉄砲の玉」「唐人邸」「阿蘭陀館」「諏訪祭礼」「聖靈祭」「葬式」「大徳寺鐘」の十項目をさく。この種の記述方式の嚆矢ともなつた橘南谿の「西遊記」もいわゆる旅行記の代表作であるが、やはり、太宰府の記事は全く無く、長崎については、「魂祭」「目鏡橋」「東海氏の墓」「卓子」「奇器」の五項目を費している。

当然のことながら長崎は、中世以前の紀行文には登場しない。それが、鎖国日本の中で唯一異国に開かれた窓として、「船中より眺め玩べば。身は異国に渡れるかと思ふ計なり。」「異国の神を唐めきたる構に齊籠たるを見るにも。たゞ異国に來れる心地せり。」(菱屋平七「筑紫紀行」)「長崎の町くたりありきけるに唐人唐舟など見えければ世の常ならず賞待りて」(渡辺綱峯「筑紫日記」)のような独自の魅力を備えるのは、近世になってからのことだからである。

存在しないものは描けない。中世以前の紀行文に近世の長崎の描写はなく、したがって、長崎の魅力にひかれて訪れた旅人たちは、過去の紀行の名作を模倣して、類似の文章を連ねることができなかつた。

一般に東海道、木曾路、日光道中など、各街道の紀行文は、共通して引用する古典紀行を有している。東海道では「海道記」「東関紀行」「十六夜日記」等であり、木曾路では細川幽齋の「老の木曾越」が、日光道中は近世の作品だが益軒の「日光名勝記」が、よく利用されている。しかし九州紀行の場合、宗祇や幽齋の作品にそのような影響力は見えない。林英存「筑紫道草」はむしろ南谿の「西遊記」

を随所に引用している。

長崎という新しい名所の出現によって、近世の人々の中では、九州の地理的把握自体が長崎を中心とするものに変化し、中世以前の紀行の伝統を継承していただくだけでは処理しきれない九州像が生じてきたのではあるまいか。

その中で太宰府が名所として一定の地位を保ち得たのは、菅神信仰ともまつわる文学的な伝統の強さか、古典紀行の影響がやはりここには残存するのか、速断しがたい。長崎への行程に比較的近い地の利もあつたであらう。しかし、太宰府にしても、描写それ自体には特に古典紀行の影響はうかがわれないようである。

5

新名所長崎への興味を中心に、新しく作りあげられてゆく九州紀行は、どのような特質を持つか。人々にとって、長崎の魅力とは、単に異国船の持つ華やかさだけではなかった。その地で「異国」を感じることは、とりもなおさず「太平の難有国恩の高きに登り慈親の恩ともに深を涉り遠く故国のことなとも思ひ続け」（「筑紫道草」）「たゞ忘れまじきは国恩なり。かゝる戸さゝぬ御代にうまれ、万里あなたの蛮夷を面前に引寄、おのゝたのしみとして庭前の泉水へ遊山舟を入て見物するに同じ。日本開びやく已来かく日出度御代はなかりし事なり。くれぐれも邪心なく有がたき事に思ふ事一大事なるべし。」（「西遊雜記」）といった、満足して屈託のない国家意識の確認でもあつた。

古松軒などは「東遊雜記」の蝦夷行の際も、ロシアの侵攻を警告

する林子平を嘲笑し、松前藩の繁栄ぶりにすっかり安堵して「林子平が氣遣ひにおもふムスコヒヤ（モスクワの意か。ロシア女帝の名とされている）。蝦夷地に志ありとも、松前侯の武備あるをもつてはおもひもよらぬ事なり。」（「東遊雜記」）と述べているから「西遊雜記」のこの記述も当然であらうが、彼も含めてこういふ姿勢が、楽天的にすぎる気はしないでもない。しかし、現体制への信頼と、それに基く自信から生ずる、この異国への好奇心には、畏怖や卑屈さはなかった。これは、蝦夷紀行類にも共通する、近世の紀行作家たちの一つの特徴といつてよい。

井上忠氏は人物叢書「貝原益軒」の中で益軒の長崎行にふれて「この際（慶安三年の長崎行）の際の彼の行動は記されていないが、その後も（黒田）忠之の命で二回来陽し、後には唐書書籍商や、唐通事・蘭通詞らとも交渉をもっている、彼がつねに説いた『四海同胞』という鎖国制確立期には珍らしい一種の博愛主義思想の萌芽はすでにこのころ、この地を介して生まれたと考えるとよからう。」と、その影響を指摘される。たしかに益軒の次の文章に見るような客観的で正確な異国の文化の観察と許容は、九州紀行類の長崎部分の叙述にも共通する。そこには異なる文化への劣等感もなければ、その結果生ずる過剰な優越感もない。

紅夷人、礼儀正しく法度を守る事諸夷にまされり。毎朝父母の床の前にいたり、慎んで礼拝す。有妻者長崎に來りても、妓女をかさず。其妻の像を絵がき長崎に持來り、日々是を見る。男色を好まず。其禁甚嚴なり。若しをかす者あれば罪科に行なふ。二人共くびりて、海に沈む。船を能乗て世界の事いたらざる所なし。常に蒸餅を以て糧とす。鶏豕牛肉等をも食す。日本人の食と異り、

羹なし。牛乳を何の食物にも點じ食す。菜蔬など日本の種類と異り、菜類は長崎にて、出島にうゑ付て有之、へんるうだと云物、日本人の山椒葉を用るかごとくに、食に加へ用ゆ。紅夷の文字横行、字数二十五有。用る事日本のいるはの如し。刀劍、日本の刀にかはる。そりてうすし。鳥獸草木皆中華と日本かはれり。医薬も外治内治有。

更に、表現の面で言うなら、長崎を描く近世紀行は、その実態を讀者に伝達するために、古典紀行を引用して常套的な文章を連ねることができず、正確で具体的な独自の描写を生み出していかざるを得なかった。たとえば阿蘭陀船の細密な説明などにも、それはあらわれている。^{註12}

6

九州紀行の全体像については、たとえば、小倉・博多・熊本・鹿児島といった都市の描写、阿蘇山・彦山・高良山・宇佐八幡などの位置づけなど、まだまだ検討の余地は多い。しかし、中世以前の紀行文では記述の中心となっていた太宰府を、近世の紀行文がその伝統を意識して、行程の中には残しつつも、主要な興味は長崎の方へ流れてゆく、という一つの推移は見てとれるように思う。そして、伝統的な紀行文の持つ情感や文飾と関りなく描かれた、この新しい都の見聞記を持つ、異文化への積極的な姿勢や、具体的かつ正確な文体が、結局は九州紀行の基調となっているように思う。^{註13} 蝦夷紀行程明確ではないが、九州紀行もまた何がしか、辺境の冒険記といっ

た要素を帯びることがある。蝦夷地と異なるのは、そこに宰府や宇佐のような古い文化の残存を旅人たちが認め得たことであるにしても、辺土が同時に異国との接点であるのは、ロシアが出現する蝦夷地と同様だった。九州紀行が長崎見聞を通して持たざるを得なかった国家意識や世界観は、蝦夷紀行と共通する。それは、近世紀行文全体の基本的な性質とも奥深くかかわっているものようである。

本稿は昭和61年度九州大学国語国文学会に於て発表したものである。その折、大内初夫先生、田中道雄先生に、貴重な御教示を頂いたことを感謝する。

(昭和61年8月31日)

註

1 拙稿「近世東海道紀行の諸問題」(福岡教育大学紀要第三十六号)・「公旅紀行について」(同上第三十五号)・「近世女流紀行文の性格」(語文研究第四十一号)参照。

2 別表1参照。注意すべきは筑紫あるいは九州といっても、まったく九州についての記事を欠くものがある。「不知火行記」「筑紫道之記」「旅の日記」(国書総目録に九州への紀行とある)など。また「筑紫紀行図誌」も内容の大半は九州以外の部分である。その他にも題名からは判定できない九州紀行も多数存在するであろうが、今はさしあたり、年表にとりあげたもののみについて検討を行う。

3 周知の如く芭蕉は「持病下血などたび／＼、秋旅四国西国もけしからずと、先おもひとゞめ候。乍去備前あたりよりかならずとまねくものも御座候へば、与風風にまかせ候ま而難し定候。」(元禄三年四月十日付如行宛書翰)「尚く、九州四国之方一見残し置申候間、何とぞ来秋中ニも又く江戸ヲ出可申覚悟 不定ながら御待被成可し被下候。」(元禄四年九月廿三日付

中尾源左衛門、浜市右衛門宛書翰」と書翰に記しつつ、九州へはついに赴かなかつた。しかし、偽書とされる十月十三日付北枝宛書翰に「春ハ西国望ミ御坐候間、冬中調へ申度候(略)西国へハ何とぞ同行に致度候間、其御心得頼入候(略)二十六年以前、太宰府へ参詣いたし候。外(に)連貳人、我と三人にて歩行候へども、知音もなく候て見物所斗尋帰候。宗房時分の事に候得ば、所々(宛)留候へどもおかしからず、とのはぬ事而已にて、一句も咄事なく候間、此度ハ吟じ直し度存念ニ候。」とあり、「陸奥衛」の桃隣の語として「然ども老たるこのかみ(郷里の兄松尾半左衛門)を、心もとなくや思はれけむ、故郷ゆかしく、又戊五月八日、『此度は西国にわたり長崎にしばし足をとめて、唐土舟の往來を見つ、聞馴れ人の詞(長崎に集まる外国人のことば)も聞ん』など、遠き末をちかひ、首途せられけるを、各品川まで送り出、二時斗の餘波、別る、時は互にうなづきて、声をあげぬばかりなりけり。」と太宰府と長崎の地名が登場するのを、注目したい。

4 高橋富雄「辺境」(教育社新書)。

5 九大国語国文学会での発表の折、大内初夫氏から、近世の九州紀行とりわけ俳人紀行類に於ては、北九州ではなく大分方面から上陸する経路が多く、とりあげられる土地についても、長崎、宰府と並んで阿蘇山が多く、この三地点を結ぶ三角形の旅程が成立するとの御指摘をうけた。ここではとりあげていないが中島広足の紀行類、清原院軌子の紀行などは大分を経由しており、私が見る作品中には更に多く存するかもしれない。しかし今回収集した紀行類は、近世の時代全体にわたり、特に意図的な選択は行わなかつたにかかわらず、大半が北九州から上陸していた。また別表Ⅲに見る如く、これらの作品に関しては、阿蘇山をとりあげるなら、彦山、宇佐、阿弥陀寺なども記事が多く、無視できない。或いは、俳人紀行類には、ここにとりあげた紀行類とは異なる傾向が存するかもしれない。なお今後、検討させて頂きたい。

6 一般にこの紀行文は他の土地に関しても「当地ノ外国ノ通津所ニテ極メ繁華ノ港ナレトモ人氣險惡ニシテ奢侈放蕩ナリ故ニ貧人ノミ多く絶テ豪富ナル家ハアルコト無シ」(長崎)「市中士民居住ノ町ヲ熟視スルニ福岡広

島岡山等ヨリハ甚タ広ク商人モ多く豪家モ有ル由ナレドモ草齋ノ貧家雜リテ見苦キ町多ク人ノ通行スルモ右ノ三城ニハ劣レル様ニ見ユ」(熊本)「阿蘇山格別ニ高山ト称スベキ程ノ山ニモ非レドモ古ヨリ火ノ燃ルコト今ニ至ルマテ断断アルコト無シ」(阿蘇)「世三名高キ旧跡ナレドモ按外ナル僻地ニテ(略)只頻リニ参詣人ヲ誑カシテ錢ヲ貰ハンコトヲ謀リ極テ卑劣ナル風俗ナリ」(宇佐)と、齒に衣着せぬ表現が多い。

7 昭和二十七年太宰府天満宮発行。

8 太宰府を九州における政治上の拠点ととらえる意識も皆無ではなかつたかもしれない。のちの長崎がそうであるように、辺境の外交の場への人々の興味は意外に深い。たとえば大久保勘三郎「くし草」は対馬を訪れ、そこにおける朝鮮との外交について、長い観察と報告を行っている。

9 画瓢坊披雲「太宰府天満宮略記」(寛政十一年 博多 対馬屋五平刊)の文章は多くこの書によっている。

10 近世における長崎の位置について中野三敏先生は「なかでも、西国筋は、その終着点に日本の窓といわれた長崎をひかえていただけに、おのずと他の地方とは別の意味、別の価値を持ち、その価値は釋末にむかえばむかうほど増大していった」(朝日新聞連載「西国路と近世文学」——現代への反省——)と述べられ、「いうまでもなく、当時の長崎は鎖国体制下の日本にあつて、海外にむけて開かれた唯一の窓であつた。そこからは中国、西欧の文化が統々と流入してくる。早くは慶長十一年(一六〇七)に林羅山が、この地で「本草綱目」を購入した例もあり、蘭学に志す者のみならず進歩的知識人を自負する者にとつて長崎は一度は訪れねばならない土地であつた」(同右、——江漢と長崎——園田豊氏)との指摘もある。また「この場(近松「博多小女郎波枕」上巻、博多柳町奥田屋の場)は遊里らしくにぎやかな鉦太鼓の歌が始まる。これは『松の落葉』(一七二〇刊)によれば、もともと唐音の「唐人踊」という歌なのであつて、雰囲気はむしろ長崎の遊郭丸山風である。(略)近松も大阪の遊里になるとかなり正確に描写するが、ここは遠い九州の地、それほど実際にこだわる必要はなかつたのであろう」(同右、——近松と博多——橋英哲氏)という指摘もあつて、九州におけ

る長崎の存在の強さを示すように思う。

11 拙稿「古松軒の林子平批判」(近世文芸第三十四号)参照。

12 たとえば次のような描写がある。「出嶋の前四五町沖に阿蘭陀船四艘か、れり櫓三本宛各上に鏝のやうに棚二重見えたりはしらに掛張たる縄五六十筋それをつたひのほりに下なる棚に四五人座せり其棚壱丈四方斗上なる棚にも二人居れりそれも一間四方斗いづれも帆をあくる時の便と云り櫓毎に上中下帆を三段にかくれハ也船の長さ大なるハ三十二間まハリに石火矢の挟間二十ヶ所斗櫓の方におそろしけなる人形其外色々彫物見えたり元来ゆへなくてハ船の辺へも制禁なれハ遠目にてつふさからず」(神原伊安「筑紫道之記」)「さて大船なか／＼書にも辞にも述べかたし。船チャンにて黒ぬり、蘭干のみ黄色なり。石火矢筒一方に二十五、総て六十程あり。櫓の方屋形あり。ピイドロ障子にして、海を望む帆柱ラ三ヶ所に立つ。帆綱は誠に、くもの巢の如し。綱毎セビとて、萬力車あり。綱は表と櫓の方へは余り張らず。左右へ數十すじに張る事剛く、其綱に横に亦張りて、はしごととして登る。帆を掛るケタは揚げおろしをせつ、帆は此ケタに巻く。久しく船かゝりする時は、帆をはずし、帆亦長力なりに非ず、四方なり。中の柱に三つ、先の柱に二つ、矢帆一ツ亦二ツ、ともの方には大きな帆一ツ、是は向ふ風に乗る開き帆なり。年々船速ひぬ。表に獅子を黄にぬりてあり。船中を働く者をマタロスと云。是はおらんだ地方の者なり。衣類は蘭人の如く、寒中足は履なし、す足なり。之は柱へのほり、帆綱を渡る故なる歟。此者陸へあからず、只船中のみ暮す事なり。此マタロス帆綱より、帆つなに渡り、軽はさをし、水中へも入事妙なり。」(江漢西遊日記)。

13 ひとつひとつの紀行について充分に触れる余地はないが、たとえば高木善助「薩陽往返記事」は八回にわたる鹿児島への往還記である。幸府はこの行程上にあたるため何度も通過するが、他の土地へはそれない。訪れているのは霧島と長崎のみで、長崎には幸府の倍の量にあたる記事を記している。

14 このような傾向について、田中道雄氏から、長崎を通じて流入した科学的精神の反映はないかとの御指摘をうけた。充分に考えられることだが、

今それを具体的に検証はできない。多くの点で長崎見聞記と共通する蝦夷紀行においては、博物学者たちの果たした役割が認められるが、九州紀行ではそれほど明確ではない。拙稿「蝦夷紀行概見」(「江戸時代文学誌」第五号掲載予定)参照。

別表Ⅲ 各数字は丁数(活字で参照したものは頁数)を示す。

書名	全体	九州	宰府	長崎	阿蘇	宇佐	彦山	阿弥陀寺
筑紫道記(宗祇)	22 P	16	2	0	0	0	0	0.5
九州道の記(幽斎)	19 P	7	1	0	0	0	0	0.25
九州の道の記(長嘯子)	8 P	4	0.5	0	0	0	0	0.2
筑紫紀行(定清)	7 丁	4	1	0	0	0	0	0
源忠総朝臣豊後紀行	20 丁	6	1	0	0	0.5	0	1
筑紫道日記(伊安)	63.5 丁	42.5	2	10.5	0	0	0	1
筑紫巡遊日録(可澄)	70 丁	37	0.5	0.5	1	0.5	0	0.5
日本行脚文集(三千風)	220 P	54	2	17	1	2	4	4
筑紫遊記(道忠)	26 丁	21	1	1.5	0	0.5	0	1
道之安良	22 丁	5	0	0	0	0	0	0
中川泰寛旅行日記	119 丁	35	1	0	0	0	0	0
長崎行役日記	57 P	23	2	17	0	0	0	3
伊藤某九州廻り之記	6 丁	5	0.5	0	0	0	0.5	0.5
筑紫日記(綱峯)	12 丁	12	1	1	0	0	0.25	0
筑紫紀行(裕夢)	39 丁	24	0.5	8	1.5	0	0	0
西遊雜記(古松軒)	112 P	99	2	8	1	0.25	1	0.5
筑紫紀行函誌(素言)	153 丁	25	0	1	0.5	0	0	0
江漢西遊日記(江漢)	62 P	25	0.5	7	0	0	0	0.25
鶴台九州紀行	30 丁	30	0.25	0.25	0	0.25	0.25	0.25
太宰府紀行(九大)	40 丁	24	7	0	0	0	0	6
〃(ソウル大)	20 丁	20	0	0	0.5	0	0	0
筑紫道草(英存)	148 丁	144	14	41	2	13	0	1
筑紫紀行(菱屋平七)	192 P	85	14	20	0	1	6	4
日本九峰修行日記(成亮)	198 P	45	0.2	9	1	0	0.5	0.5
鹿兒島日記(杉浦義信父)	46 丁	17	0.5	0	0	0	0	0.5
(鍋島紀行)	15 丁	3	1	0	0	0	0	0
菅の下葉	104 丁	73	2	17	0	1.5	0	0
薩陽往返記事(高木善助)	67 P	59	1	2	0	0	0	0.5
菅根長崎日記	27 丁	20	1	3	0	0	0	0
不知火行記	66 丁	0	0	0	0	0	0	0
五月雨紀行	35 丁	3	0	0	0	0	0	0
筑紫道之記(双鶴)	31 丁	0	0	0	0	0	0	1
長崎日記(川路聖謨)	132 P	85	0.5	64	0	0	0	0
塵壺(河井継之助)	35 P	17	0	6	0	0	0	0.25
旅の日記(根本重蔵)	26 丁	0	0	0	0	0	0	0
山庵長崎海陸紀行	19 丁	15	0.25	13	0	0	0	0.05
佐藤信淵九州紀行	67 丁	57	2	2	2	0.5	2	0.25
薩藩江戸上り道中記	126 丁	20	0	0	0	0	0	0.5
贈一忍子九国紀行	3 P	1	0	0	0	0	0	0.2
西海雜誌(松浦武四郎)	124 P	124	0.5	9	1.5	0	2.5	0
長崎紀行	233 丁	0	0	0	0	0	0	0
筑紫海路記(宗敬)	7 丁	1	0	0	0	0	0	0
筑紫紀行(もと日記)	26 丁	0	0	0	0	0	0	0
つくし草(大久保勲三郎)	72 丁	72	0.5	6	0	0	0	0